



朝顔日記  
外篇  
五

3149  
5





特  
3149  
5

朝顔日記卷之三 故芝叟遺話

七回 月

今茲秋月弓之助が娘の深雪青春破瓜もふりく父  
弓之助佳婿ととりて。ふと小妻あいせんと。渾家の水青  
もろとも多方針が費や。詩歌茶香の友どちふさつた  
のこて。才貌双全人とどたづねける。弓之助が和歌の伴小  
加茂祐包といふ人あり。忽日岡崎村よ来り。弓之助はあ  
ひていへらく。かねが足下の望まきける才子こそあん  
ねま。と東福寺の月心和尚。さいつごろ浪士宮城阿蘇二郎  
といふ人。嵐山よて邂逅。ふと瓜かた。舟りけてなまち

柳浪



朝顔日記 卷之三



の音よあそふらむ。あらしのやゆの花の本らうと。とよも  
たるふと。またそのゆよべの夕詩は渡月橋頭人渡月。月  
明還在緑波間とつくまを。その氣宇の軒昂はさらふも  
いとす。才器ハ古今獨歩おと申さまき。下官ハいまど  
その人見ざまども。さらうぞくうらねき月心師の語  
ふ。いつてまハあるべうらざ。心師ハ緇徒のふとね。誰をべ  
ちふまうるべき。氷人ハたのて。媒話て見たまふべしと  
叙らまける。弓之助ハもとよ。祐包の篤厚をよく知  
居まば。つねふとの憩言といねもはず。ふくくその語ハ信  
ト。そハよくもまつせたまへ。さもあらば。蔓ともとめ  
て。かたらひ見侍らん。とあつくその好意ハ謝し。種々敷

待てど。田けける。さまども。夫の弓之助ハ生まつきたる。懂  
密よて東福寺の月心とい志たし。友垣おる。夏中山  
籠まして。戸出せらますと。きく。ことくたづねおれて。和  
尚の學窓ハ偶堅して。半日の閑談をふし。その洗いでよ  
阿蘇次郎ハ人品をどたづねける。月心ハへらく。かの宮城  
氏ハ今の世の英雄よて。まこと小玉佐の才ある人か。詩  
歌の類ハその緒餘よて。已よふのころさ。まえし。かの人の  
うたよ。

うさふとのみか。そのうへは。ほもまじし。か。さうりある。父の心ため  
さんと詠め。ま。あの歌のうろいさを。翫味見たまへ。大志夫の  
氣象よあらざや。弓之助。ま。その品表を問。瑕ふ。死壁



と知しゆせとのふまど。弓之助大よよろこび。志むくまよ。四  
表八表うちかたらひてかへるぬ。かくて弓之助次の日も  
渾家水青等とまのことなかつた。宮城氏は親き  
人もがふ。氷人よ央てんとつぶやく。日比志の家よあつろや  
そく入来る醫者よ。橘雞菴とつふものあり。とつふくその  
坐居あいせ。ふまをそくて酒酸鼻たおめう。その僂  
倅ふるまことそあま。その宮城氏ハ不佞とい仔細有て  
日比親しき中らひおると。そまよ。馴染る由ともあらま  
しほげ。不佞良媒たふさばたやそく事成おほせ申  
さんと。またま貞して阿蕪次郎が才と。標致とを口小ま  
まうせて。褒るまことふらう。説得て天花も乱墜

るばりつねおま。弓之助が性として。かくうたたる調子小  
のらとも。バいづまは足下の紹介を蒙りてん。さま  
おがら一應その人品たため。見たるうへのおとふみ  
そとて。最愛の一個愛玉おま。かく大事小かけて念  
ぬいらくも道理ある。かくて日経一が。弓之助ハ今日  
も省よ来る鶏菴とどめて。とや八月も二日三日立ぬ。  
来る望の日ハ。こら宿よて賞月筵を催し。縉紳家兩  
三位が請じ奉り。例の祐包月心ふどとも。招き待ら  
なす。幸のをまふま。御話の阿蕪次郎とやらんとも一  
坐せしめて。その人品とも見ま。けま。貴老多勞お  
から。宮城氏へ来る望の月の筵ハ。かからず。光貴たま



へと目が語と傳ふはほどよくいしらへたまはまゝ宿題  
 ぬさへおとげけてほしきける。雞菴いふをと允容やがて  
 岡崎ぬち出ぬ。鶏菴もと秋月が内福ぬよくさとりある  
 也へ。事成ハ一廉の媒表ぬまてやらんと。とむろふ例の  
 火ぬ動りし。とや手ぬ取たるものやうふ。ふどく揚  
 揚とちて下河原いたる。宮城阿蘓次郎ぬあひふとく  
 笑ぬ泣く。志うくの由とつけ。来る十五日小ハ。秋月氏  
 の高會ぬ往せたまへと約ぬふしける。さてまた岡崎  
 ぬるむをりの深雪ハ宇治ぬて春戀一情郎ぬハ筑ハが  
 その名ぬ書はけくまし。宮城阿蘓次郎とつふことを  
 志ます。今志もその人ぬ婚ぬせんとの私意ぬて。多君

月見の支度せらるぬ見ぬ。ふらふぶとをかざす。ぬ。媽の  
 水青ハ乳媪の真柴。了眾の浅香とも。顔見合てうちさら  
 へ。さもども水青ハ。物がとれた良人ぬおそま。前ハ阿蘓  
 次郎と。螢狩ぬていであひとる。あたとぶらりか。侍女  
 ども小も口ぬめせし。ゆへ。たいふを私下ぬて。さやれたあひ  
 とぬいそし。といさそたち。何とぬくいさまし。けふぬ見え  
 小ける。かくてその日小か。まけま。バ。女兒深雪ハ。朝やださ  
 ぬ起いで。紅粉ハ。燂脂よ。いと靚ハ。粧ひうご。搔頭  
 いたつと小せん。玉簪ハ。よりし。かちま。とやふど。うち  
 躊躇は。鏡臺ハ。向へハ。真柴ハ。小姐の背ぬ。ほどく。さ  
 うちたくさて。あやか。まものふと。べ。ふど。と。さ。あとい。い。

安房加保 卷之三

〇四



浅香もまた。ふうらやましくさうらへかどそくのりして。闔門  
 ざりて居たりけり。日も斜に傾ふくさる。橘雞菴真書  
 ふふつてかけ来り。喘吁くさひひけるり。さて遺憾あり。か  
 の阿蘇次郎ぬ。俄病づきて得まゐるがごとし。よろしう  
 ありとて。くまよと申さるぬ。今朝願しときハ感冒もあは  
 かと治しゆへ。いづいぶん伴ふひ往てんとて。月代を包み居  
 らましが。後又誘はゆと一時ハ。いりおも大熱さし出て。  
 頭痛劈やうふまとして。高枕ぬかして。うち呻吟居られき。  
 脈が診いさうらうふ。一かこふらぬ再感の邪勢ふまは。参ま  
 めも無理ならず。さきど阿蘇次郎ぬ。重き枕とあげて。お  
 の体ふまは。してもえまゐらざ。さきかから。御兼題ハ詠ね

こととる。今宵の東人へ。いけくまよ。さうさきし。と。  
 懷裏さかして。とて出。弓之助へ。通しける。弓之助も。み  
 けとて。志をいあさきて。語か。渾家小姐も。やどし  
 望み。うらふ。簪の花が風よとらま。さやけさ月の黒雲  
 小掩も。あちして。天さへ志を。かきとも。いさうち  
 ありて。ぞ見得ける。弓之助阿蘇次郎が。兼題のう。こと  
 讀バ。うつくしき手して。  
 山のこれ人。うらふ。か。い。かくも。が。か。入。さ。お。い。た。月。の  
 かけ春雄と名な。志るせ。ま。ま。ね。ん。その。日。の。秀。逸。と。こと。  
 ける。明も。バ。雞。菴。ま。と。入。来。ま。て。前。宵。の。ふ。と。ね。ど。問。ける。  
 弓之助ハ雞菴。對ひて。か。ふ。べ。の。會。ハ。賓。客。た。ち。も。宮。城。



氏と一坐せざるが遺憾ふると申さまき。おの宵の賓客の  
 詠草ふる。己夫婦がよと歌とも交へて雞庵に遊し。  
 つめてもあらばおま宮城氏へ見せてたまはましたの  
 るぬ。おのひまふ深雪ハ。おまおひとのべたる一首の戀歌と  
 短冊よまため。雞菴がたり回る袖ぬひささめ。おまおま  
 のおましと。かの懐紙の中ふ巻おめてことせ。雞菴ハ何  
 の氣もはらうど。そのま懐抱よとしいま。慌忙下河原よ  
 いた。阿藤次郎が容体ぬ診て。弓之助が口詞ともは  
 たへ。件の懐紙とさしおきて回しける。あとおて阿藤次  
 郎ハ懐紙どもくまうへ一覽中ふ一枚の短冊。とままれあ  
 ぶおとまあげ見まが。

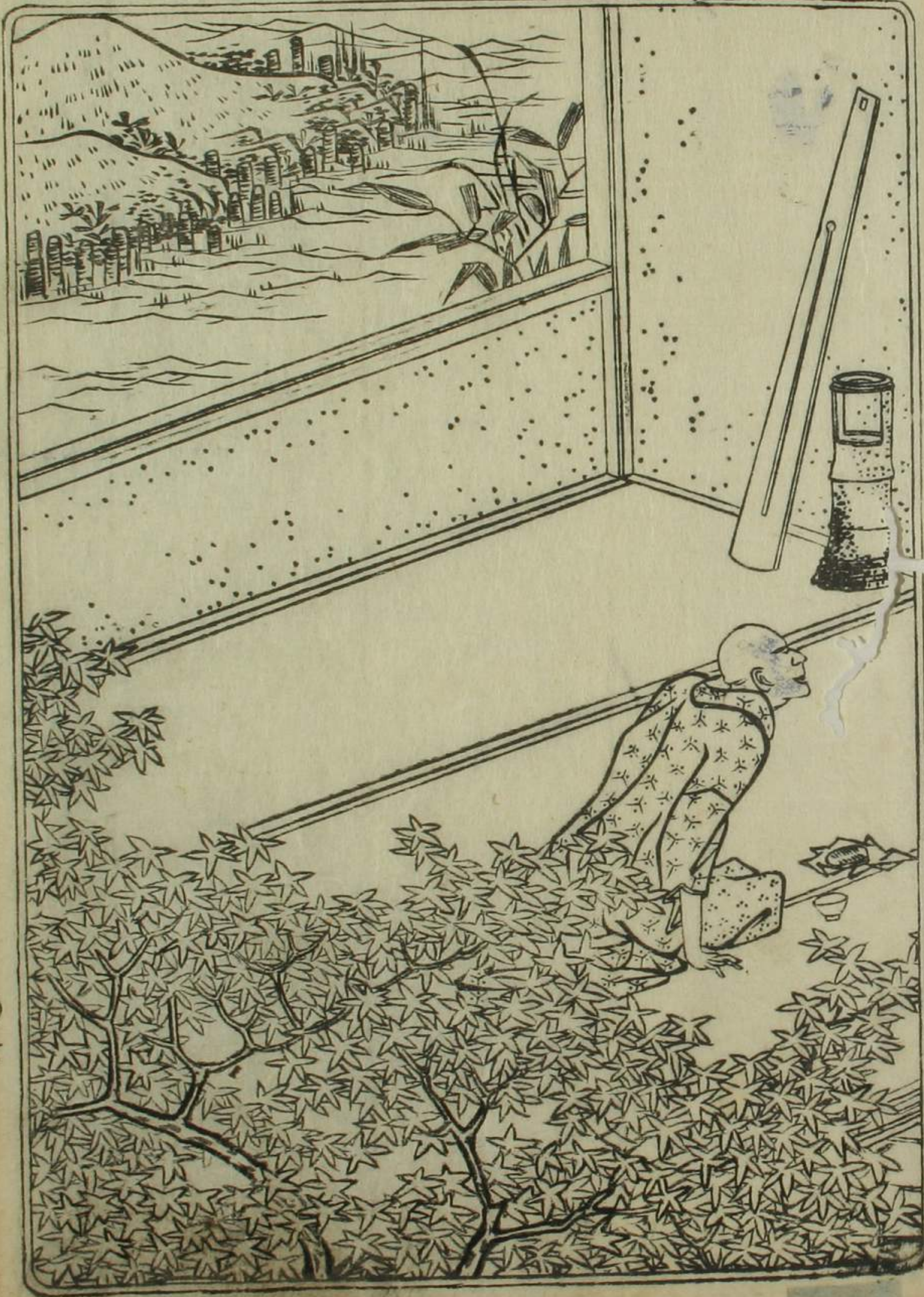
かうしてい末のうとがぬいふせんおもつけ魚たつ宇治の  
 川霧とかひたる墨痕いとほゆけし。阿藤次郎はくしと  
 ちまもまおの歌ぬしの名深雪とあるせ。日外宇治よて  
 あいしも深雪ぬるまおの歌のあらもぶうしとひとま  
 おちて思案のかうべとかたぶけぬ。

七回 假

そのち荻野祐仙ハ醫學修行せんともろく洛陽ハの  
 ぼ。三本木よて川つきの院落と借。おのころ拙はまあ  
 けるよ橋雞庵ともはしおくいてあひらる。雞菴ハ當年の  
 背約ぬこひぬ。祐仙もとよと蠢愚しとものおまが早く  
 雞庵が倭辨よたらまき。まて懇結交ける。一日雞菴



薬医 萩野  
 祐仙 三本木  
 の 儼舎  
 了て 桶 雑 煮  
 乙は くり 假 婚  
 と ね 王 秋 月  
 謝 さいごのひく  
 さいごのひく



宇金鑑  
 所月 到 虫 介  
 東生 四 四

布 袋 今 分 布 袋 寄  
 今 高 抱 布 袋 寄  
 堂 亦 分 力 万 徳 今  
 何 処 一 月 七 日 也  
 月 圓 日 圓

坊 尤 方 儀  
 卷 之 三



祐仙ゆうせんが三本木さんぼんぎの旅亭りょていよまた話わけるハ昨日きのうハいと遺憾いんげん  
 夫おとことこそあつた。惜あはれびべし。一簾いつれんの祝酒いっしんハ契ちぎとこふひれと  
 呬はやく。祐仙ゆうせんいふうしくねもひ。その何等なんらの夫おとことあつたやと  
 問とけま。雞庵けいあんいへらく。さが友宮城ともみやぎ阿蕪次郎あゐりじらうハ。秋月あきづき弓ゆみ  
 之助のすけとつふ人ひと。一個いっぺい女兒むすめの督とくとせんとして。まづその人品じんぴんハ  
 見みましくおもひ。月見つきみの會あひハ催もよほし。不侮ふまらハ紹介しょうかいせしめて招まね  
 かましが。已いとよその日ひおねて。阿蕪次郎あゐりじらう病いびつとて往むかごふ  
 ちへそのこと遂つひに水みづよなき。噫あやハの阿蕪次郎あゐりじらう福分ふくぶん薄うす  
 うして。絶世ぜつせいの美人びとんハ占得うらごつと。只管いづれの嘆息たんそくして止や  
 ざしける。祐仙ゆうせんいへらく。そまハ園崎そのさきの秋月氏あきづきうぢよて。その美う  
 女むすめの名なハ。深雪ふかゆきといふ。夫おとこととも志こころま。雞庵けいあんふどく

あやうと。いふふも志こころま。書邊かきへハいふふして。よく精せいしく  
 夫おとこまたまへる。祐仙ゆうせんなくそ名なまていへらく。小生せうせいさいつぶる清せい  
 水みづよまうでし。時とき舞臺まいたいよて由よしちがひ。その人ひとを見みたる  
 が。今の世いまのよの薄雪うすゆきともいふべく。そまはほどうつくし。かま死し。  
 そのとき小生せうせいハの姐いもうとがたとやとたる標致ひょうしを見て。肌肉にく酥す  
 麻あして酔よるがぶとく。そまより夜よとして。夢想むそうせざるは。し。  
 その日ひあつつけて見み得えかくま。慕まひゆと。かの人ひとをとめる。  
 園崎そのさきの莊院しやういんとも認まけ。且隣かつりの老婆らふハ問とてその苗字ななざをも  
 夫おとこまぬ。ほねぐ清水しみずの圓通菩薩えんつうぼさつハ願籠がんろうして火食ひものた禁ちかせ  
 一いっ奇特きとくよや今日けふ満まんざる日ひふあたま。足下そくよま。夫おとこの  
 手て蔓つると聞きいたせ。ハ。ま。さ。さ。さ。さ。赤繩あかじゆのある。夫おとこる。ハ。ね。と。

安宅加保 卷之三



いり、雞庵子。その秋月氏へ小姓が螟蛉の媒ね。雞庵こゝて  
 笑が忍てたもやう。那の阿蕪次郎と祐仙とをくらぶれ  
 ば、まふとふまき。雪と墨ぬるちがひよて。祐仙ハ極て醜き  
 漢子ぬ。さきども雞庵往年。まの祐仙よ。金子借り  
 と。債あるゆへ。さきしうちにけよ。和君ハ不男ふ。ま  
 ぶの縁談さるゆへ。どとはいとま。ぬるやどとくらひ  
 見るべし。さきぬがら那方よ。いまこそその人ハ見らまぬど  
 阿蕪次郎が高名が慕ひて。婿よせんとの準備ふま。まの  
 と。まハ。他人のまといひ出しても。とても承引やう。それま  
 祐仙いへらく。さきあらば小生ハ阿蕪次郎ふ。して。ほま也  
 かまよと。のつびきぬら。ず。まがひけるふぞ。雞庵もどらく

窘迫さハのたまへども。阿蕪次郎ハ月代頭ぬ。和君ハ  
 慈茹のぶと。鬘のさま。いうでたやとく。假おはとべ。祐  
 仙いへらく。ぬよと。前髪剃こし。かたうらんと。いひ  
 け。肱ぢう。調度よ。圓金三十兩と。出。まづ  
 ままハ當坐の賞標ふ。事成ま。分外の辛苦錢を  
 やいらをべし。雞庵前よ。さき。おけ。ま。まの雞庵  
 黄白が。慾がるま。青蠅の血と。むさ。ぶ。と。く。ぬ。れ。ば。  
 あ。と。い。野。と。ぬ。を。山。と。ふ。ま。先。ハ。蕪。獲。の。鬼。ぬ。ま。と。直。ま。金  
 子。と。う。け。お。さ。め。和。君。さ。ね。も。ひ。た。ま。づ。施。と。べ。と。手。段。し  
 あ。ま。ぬ。んと。間。よ。合。と。い。ひ。て。その。日。ハ。こ。う。ま。て。回。ま。ける。  
 明日雞庵ま。三本木の借儼舎よ。訪来ま。けま。い。佑



仙ハ頭ハ手拭てぬぐいよてまた。浴衣ゆいふがら小出迎いせむかひて。笑顔えがやつく  
 ました。雞庵けいあんふも奴やつ看みてともふらちこらひ。和君わきみもやと感か  
 冒いさたまひし頃このころの風神かぜのかみいとふかく。風流ふうりゅう雄ゆうも崇たかるあ  
 よと戯たふむをけまば。祐仙ゆうせん手てむやく手拭てぬぐい奴やつまばいつ  
 の間まよりハ元服げんぷく天突あまよぬ王居みて蝶ちょうるふはけ鬢びんせしぶと  
 くぬまば。雞庵けいあんハあま王みのあとも興きようをとまし。まば一呆あそん  
 面おもてへ笑わらとへせず。祐仙ゆうせんハいとほま王みうふふとよく似合にあひ  
 けらん。そやく秋月氏あきづきうぢへはまゆきねと、只顧ひととらたのをけるゆ  
 へ。雞庵けいあんハとしてものあとお。今いま十四五両しごうりやうも騙收だまらさんと。計較けいけう居  
 たまば。祐仙ゆうせんがまうく月代つきやしろまでまてまて。まさ王みてせりたる  
 ちへ。一日いちにちくといひのむし。幾十いくじゆの日數ひかず奴やつ過とけるが。一日いちにち

祐仙ゆうせん清早きやうさうよ王み出いけりて。雞庵けいあん奴やつひつたて。今日けふハせいと  
 も。秋月氏あきづきうぢよ引見ひきみさまよと。さびしく催促せうそくけるふぞ雞庵けいあん  
 を今いまハ逃のがる語ことばふく。まぶく穿換くわんかんして。祐仙ゆうせんとらちけま  
 だち。一条いちじやう度橋たひしの宿やど奴やつもぬま。さらばまづ東山とうざんと逍遙せうぎやうし  
 こそと。伴ばんふひゆさて。四条しじやうの板橋いたはしうらした王み。芝居しばい側がはと  
 あと小見せみあし。祇園ぎゑん林りん奴やつ徐々じゆじゆと傍徨たわらひあましく。警對面けいたいめん  
 奴やつ見みまば五箇ごかんむり王みの武人ぶじん一個いっごうの小廝せつぱよ草鞋くさじや加手かてせて。南  
 のかこよ王み出来いまば。雞庵けいあん因果いんぐわと口くちにて。祐仙ゆうせんよむらひあ  
 まこそ。秋月あきづき弓之助ゆみすけ殿のりよとらふ。出合頭であひがしらよ雞庵けいあん老らうふ  
 のあいだ。いりよ見みかご王みたまひ。堰いん鼠ねずのちちやま王み  
 けん。絶たつて御尋みたまもあらすといへば。雞庵けいあんもままよ應おとす。かれ



夫も丁寧な寒温以取一つ弓之助かさねてかの宮城氏今  
 不どい御病氣も全快ありける。這方ハ何時までもくる  
 しからず。かぬらず御同伴まで御入来ありといひける。祐  
 仙ハ適間よ。志さす小雞庵が袖ひきて宮城阿蘇次  
 郎も志す。雞菴子もやく。秋月大人へ引見らまよと。ほふ  
 やく。雞菴も今さらふよとせんもべねく。僥倖ふまよ宮城  
 氏病氣全快まで同道いたした。やよ阿蘇次郎どの。  
 とやく秋月大人へ名對面あまよ。弓之助へいさあひす  
 まバ祐仙ハ武人の身ぶるがせんと。まよふまよまよ  
 衣紋が正しく小生ハ宮城阿蘇次郎と申とももの以来  
 御懇意がひむまふん。日外の御會一のとういあや

小くよ所勞侍まで得教上いとさす。約がをいき失礼と  
 申。残念志ぶくふいと。さよ大内の御七の子よて藩士  
 のつとあいの武士の口状がおぼえ居りゆえ。後いさすま  
 づい假粧をま一つ弓之助もな見るよ。大よまどろた。  
 やしむる呆ま一が。世よいままかくまで揃よそろひし  
 醜漢もあるものうふと。とや肚裏ハ八九分の不平を生し  
 おぼえど冷笑して。ほやく語がとへ交へど。祐仙の志と  
 ました。志した。顔して雞庵よ對ひかねて懇望せし  
 秋月氏よはらら御意を得。ふふ不どろ悦むくくい  
 途中小ての。ゆりまよ清話もぬがと。那方茶店よて  
 一献ともとりめてん。誘たまへと強よ招けま。弓之助



いと不興氣ぬまば、懶一懶、中村屋が店よめかき、葎簀  
 かくまよ、三個うち円居て、説話う、雞庵ひひとり心苦  
 志り、いまや祐仙が馬脚と露はすうと、手よ一把の汗を握て、  
 いつう、頬あうく耳やてて、不どし針の筵よ坐をとるどく  
 活たる心地もふりまけた、やがて當壚ども、種々酒肴ぬ  
 拿来て排とく、祐仙ハ上られたての青書生ぬまハ十分得  
 意の顔色よて、ひたをら東人ぶまをほく、弓之助へ盃世  
 ていたらく、おねいど武忽よ、且野趣ふるおと、つゝもろておく  
 手酌をとると、酒たる銚子かたむくる、袖口より匂い袋のお  
 ろびいでたるぞたうし、祐仙ハ何がふ弓之助への款待よと、  
 日比おのぐ同士の醜態ぬあらうし、田樂ぬ串ぬがら、犬小

喰として、王といへといひけ、天よあたへんとし、あやまて  
 膝よ墜せしな、拾とて喰かど、沙汰のかど、お小を見  
 えける、弓之助ハおまらの舉動ぬ見て、まをく、誘わ  
 らひ、這奴ハ世より名盗人の類ぬらん、本領ぬ試して困  
 せんとんと、即坐よ七言絶句ぬ作て、會面の情ぬのべ和韻  
 ぬ賜はるべしとをひけまば、祐仙もおの及第ぬいしと、窓  
 迫て、もやく韻字ぬ次で、達者ぬるところを賣毒さんと、  
 焦燥ハせくほど趣向うりまよ、のつとつ、悶搔といへども、生  
 得たる鈍漢、おのゝたれ、志とてお親ぬうらひ、おのうら  
 と何ぶとぞおまを、おのまが親が、才智ぬ澤よ産け、お  
 腹立か、ひたをら小頭ぬかたむけて、るるし、いまよや、半時



ばりて小一して。からう志て作らあけ懐なる半紙は蝸牛の  
信たる痕のおとく。滅多書して。あへぐさういたせば弓之  
助とてあけて。去の詩と着は僅々。平仄のあたるまで  
ふて。机むふせぬ未熟と。唐詩礎明詩礎たのとおる。  
源垂児の作よもあしを。そのうへ墨蹟の拙さ。宛も釘  
とまぬ。蔭たるやうお。弓之助たりまら氣色と損じ。  
遠は持病の疝氣の起を。謝語さへをこく。おして。  
その坐を蹶たて。佛頂面して。去。園崎の宅よ  
歸。氣憤々的書齋小しとを。渾家の水青ハ女兒  
を。ろとも出ひうへて。良人が氣色のたぬ。ぬらぬとをづり。  
弓之助ハ眼血を。いさまとけ。やよ水青はねく

卿とも噂せし阿蘇次郎や。今日はどめて出あひた。水  
水青ハよろおびて。とまはまづ幸のおと小とべ。さぞし  
美丈夫よてあ。はらん。弓之助うちらごら。ぬよは  
うかるふとと。丹波猿。ひとし。下。這奴虚名と賣  
弄。身の活計。なせんと巧び。ままけ。からぬ大騙局。  
雞庵も雞庵。こまよ一盃養せた。その證據ハふれ  
狐見よ。去の詩の作。まごま。とさん。ぐ。小罵。さ。いう。小  
て。心を得ぬ。祐包月心。のとも。がら。ぬ。あ。の。衆。よ。か。ぎ  
ま。と。ろ。ぬ。る。お。と。へ。申。と。ま。ぬ。と。づ。ぬ。る。よ。か。の。大。騙。局。の  
か。人。の。志。ら。ぬ。名。歌。妙。詩。と。盗。た。く。い。へ。已。ダ。も。の。顔。え。誇。り  
し。ゆ。へ。さ。む。う。の。ら。ん。し。う。ま。く。欺。負。し。の。苦。い。ま。さ。い。と。ぬ。る。

つとむ中保 卷之三



とほひはぬきばらとらふまば、水青は不どく合点ぢらず、  
その詩はとつわけ見まば、詩の意はいざあらず、その字の  
かたらいとことわけかるまど、良人の憤りハ理ふまども、真  
の阿蘇次郎が書のことまとい、鷺と鴉のたがひぬま、まハ  
必定いりふる奸者、阿蘇次郎は假粧て、良夫と欺まトと  
推量せしうど、ありてはいとまぬ時宜ぬるま、女兒深雪も肌  
身とぬこの朝顔の扇は、爹弓之助は見えま、くたもへど、宇  
治よてあひいハ、私下ぶとぬまば、いとまなぐ伎養またへて、  
母尸自と顔見合、頓口無言うち志はまつ、詰且雞庵園崎、  
省よ来まば、弓之助家眷は吩咐て、内房へととさず、己は  
病と稱して遇まば、雞庵とどく立んととると水青ハヤ

とらひまどめ、足下のことえぬ人ハぬ、いりま家公と  
欺負して、假東西は偽賣らま、無状まらぬま、と  
膝は叩きてねだまける、まの時了衆どもハ右左よま  
雞庵ととらへ、耳はひく、凡う、志たうふさいかむまど、  
まもま鉄皮かる雞庵も、不どく面目は失ひ、その  
坐またままかぬて、命からぐ逃へまぬ、さてま家へ  
回し見まば、祐仙待ぶせ居て片時も早く、岡崎へはれ  
ゆけと、催促たつまば、雞庵ハ進退あま小谷ままとも、  
その色とも見せず、ぬるほど秋月氏へ、よくいひま  
まおきたまば、何時まても訪ゆきたまへと、一寸逃といへ、  
祐仙ハまもかまとい、心得いそぎ岡崎へ往て、秋月

巻之三  
〇十四



官城阿蘇  
 次即母の今  
 般の際小こ  
 せつとて對  
 面とす



官城阿蘇  
 卷之三

四十四



玄關げんかんは案内あんないす弓之助ゆきのすけもをばきくよ。ぞう神かみたて、  
 いやか。雷守らいしゅなほうひておひうへつ。祐仙ゆうせんはいくさび往むか  
 ても。まうあまけるゆへ。さむか。星ほしの狸たぬき呆だまか。まども。やう  
 やく。まをささ。血眼ちまなこよ。おまて。雞庵けいあんが許もとよ来き。百  
 般ばんね。とふと吐はきて。雞庵けいあんがは。とり取逃とりのがれせ。二十兩にじゅうりょうふ  
 今度こんどの賞探しょうたんと。併あわせこ。五十兩ごじゅうりょうだ。今返いまえせ。との。ま。腕うで  
 腕うでま。まく。ま。あげて。雞庵けいあんよ。むさぶ。ま。ほき。組くみつ。轉ころんつ  
 雞庵けいあんの。志こころた。り。ふ。打擲うちなげせ。ら。ま。お。が。ら。や。う。く。小賤せうせんし  
 て。さ。あ。ら。ば。ま。づ。賞標しょうひょうの。三十兩さんじゅうりょうた。け。の。あ。づ。け。先まへより。取と  
 回くわいし。明日あした返濟えんきま。あ。ら。す。べ。し。ふ。ん。お。く。欺負たぶらかす。は。し。  
 その。夜よ。家いえ。伙あし。と。て。賣う。よ。し。て。ゆ。さ。う。さ。ま。ら。す。逐電しやくでん

せ。里さと。憐あはれむ。べ。し。萩野祐仙はぎのゆうせんう。ま。ま。ほ。さ。た。る。愚おろ蠢ちんと。い  
 い。ひ。ぬ。が。ら。た。く。一いち場ぢやうの。色慾しきよくの。た。め。よ。己おのれが。拘く口くちと。と。た  
 ま。へ。ど。一いち塊くわいの。天鵝肉てんがにくが。喫くせ。ん。と。し。て。ま。ろ。く。奸者せせもの  
 の。民たみよ。か。い。ま。前後ぜんご五十兩ごじゅうりょうの。金子かねこが。失うしなか。ひ。その。業わざ。ら  
 ぬ。治郎頭ぢやうづゑよ。剃かま。不ふて。ま。の。こ。と。已やま。か。く。ま。ぬ。く。世  
 の。胡慮こしよと。そ。ま。ま。お。け。る。か。く。て。下河原げがわらね。る。真まことの。宮城みやぎ  
 阿藤次郎あとうじやうの。所ところ。勞らう金かねた。く。爽さわや。ざ。け。も。バ。さ。い。つ。お。ろ  
 秋月弓之助あきづきゆきのすけの。月見つきみの。會あひあひ。ま。ま。ね。きた。る。その。好意こういが。謝あやま  
 せ。ん。と。袴はかま外そと套たてか。と。立た流ながよ。打う扮はん。今いま日ひ岡崎村おかざきむらと。た。つ。ぬ。  
 秋月あきづきの。玄關げんかんよ。ま。物ものま。う。ま。て。宮城阿藤次郎みやぎあとうじやうよ。ま。く。べ。ま。  
 秋月大人御宿あきづきおとなごしゆくよ。お。い。さ。バ。御對面ごたいめんが。お。か。ひ。侍さむらいと。い。ひ。入い



ける。了衆淺香ハ、六の声ハ洩聞物の間より、闕窺て、  
 慌ふたゆきは、一入て、奶々姐々ふも泣けさせ、闔  
 門いそくとしてよろまひける。弓之助ハ声ハそげまし。  
 執次を叱りて、例の仁うこせたる。番守といへど、高やうふ  
 叫びつ。阿藤次郎をやく聞くと、そのまゝ口杖云捨  
 一礼のへてぞたち出ける。程へて阿藤次郎が下河原の橋  
 居よ。肥後より脚力来り。事あるふよ。夫の書状着次第  
 夫のものめいほき。即日下来るへといひ越しける。夫  
 阿藤次郎慌て、僑居なれたげけ。歸心矢のおとく。夜ハ  
 日よほいてくだまける。夫の縁故ハ、阿藤次郎が父廉助早  
 く死し。獨の老母九死一生の病ハ、即露命且夕は迫りし

かバ。一門の人々を、集りけるふ。あたりも和田三浦の支屬  
 のぶとく。幼少の児女まで、瓜莢まじ。九十人、餘を、骨  
 肉なり。世よあるうらふとして。そまゝく、お記念分して後  
 老母ハ一坐を、見おがし、やがて末期の孟瓜酌か、一つこの  
 あいごまじ。坐もまじ。まて、何とねくうち、まめしぬ。此  
 時見も、らの娘ども。病床に居よ。母御前、今ハの際  
 まで、いさか、の逆事かく。一個の孫子とも、ささだてたま  
 はず。十分の榮耀果報いそぐ。御臨終おまじ。夫の世ふ  
 おも、ハのこま、い、あらせたま。いと。祝なく、さめけまじ。老母  
 おも、き、枕とあげて。今しも、そま、と、たち、の、申、さ、ろ、と、聞、て、  
 とが臨終果報十分おまじ。と、さね、と、は、ろ、く、ね、ら、ば、あ、い、に



一個の遺骸こそあま。乙の子阿蘇松は一度御國に  
出まされ。今よその安否知らず。互に御上を恐  
れし。雁のたよもたえしてた。夏人とちがひ。こ  
の愚痴未練いよ。六の雁は泣らねたる九十人  
の人よ。零落ゆき。阿蘇松は一目見て死  
たし。おぼえど聲がし。雨くと泣け。そ道  
理よ。いよ。坐よあるか。一同悲嘆の涙ご  
くよける。人々よの動靜は見え。志のひど。百般商議  
せし。よき傳と。御側室雲居の御方へたよ。て  
ふく愁訴。たよびけ。雲居の方よ。いよ。とも  
あま。とね。よ。殿へ。か。ひ。た。ま。

ひけるよ。菊池殿仰す。い。渠がよ。い。自盡代の追放  
お。い。か。す。あ。い。か。か。い。ぬ。ご。よ。と。い。わ。け。ら。ま。ま。で  
ふも罪ありて。他國せしものども。晝間ハ憚り。いぬれども。  
夜ハそ。う。小。潜。ひ。来。よ。し。無。状。ふる。奴。む。ら。ふ。ま。は。家。老  
ども。ふ。ま。う。し。泣。け。と。つ。と。查。問。よ。か。い。づ。か。ま。ど  
も。か。よ。る。國。城。治。る。ふ。と。い。重。箱。と。ば。さ。ら。を。用。ず  
摺木よ。て。滌。ふ。が。ぶ。と。く。す。隅々ハ。ゆ。き。と。ぐ。り。ぬ。が。い。ろ  
ま。ま。の。ぞ。と。あ。い。け。る。お。ぞ。雲。居。の。方。よ。い。ご。や。く。ふ  
の内意と。あ。う。せ。た。ま。し。一。門。の。も。の。ど。も。大。い。よ。ろ。こ。び。  
さて。こ。そ。か。く。急。飛。脚。に。た。て。て。俄。よ。阿。蘇。次。郎。を。呼。  
下。した。る。も。の。お。い。よ。さ。て。も。宮。城。阿。蘇。次。郎。ハ。取。も。の。を。

新古今和歌集 卷之三



とてあへど都がたちし程おく故卿肥後の國よ下  
まつき夜よままぎこきて紅鶴林の莊院よいたる旅衣  
のまうふて母の病床よろちこまへ親族並居かへ阿  
蕪次郎母の枕側よちりばき阿蕪松よてん御氣色  
いろいろあらせたまふとのぶ母ハ聞きましたまハ阿蕪松  
おつうーやと待あがきたるこが児の顔一目見るよま  
莞尔とこらひて眠るがぶとを往生せまの時人この  
哀傷ハくぐくまけまが志るさず中ふも阿蕪次郎ハ紅  
涙堰あへど声放ちて痛悲と喪のうちハおふりさ  
家廟の側よとちあもま七々の逮夜ハはとり香花と  
供して百日の間在をうぶとく仕へあげさても餘波ハ

はさせぬど御構の身ハかへままと故のおとく國を  
たちのよ南の関ハ出まバとある山家あまのこたは  
筑後の地方かまといふそまよ些の好のよたよして  
里人の児どもなあつり手習の指南ハ活業と一母の靈  
牌と設けてまを祀り這里よま且暮東のうと紅鶴林  
ハ望ま向う小双尊の墳を拜まぬとく志て一年の喪と  
はしりあはまぬまバちうき小まよ都へのぼるべいとその支  
度とぞおしたまけふ

八回 この月

かくて宮城阿蕪次郎春雄ハ筑後界の南の関の外の方  
なる春の町と起程日ハかかねて長門の赤馬が関小い



阿彌陀寺船を借て順風を颯てゆけど、不どぬく  
 播磨瀧明石の浦よそ流を小ける。夫のちふべ後背の山  
 よう、こづり小扇むうまの雲おころと見えーが、刹那小一  
 かさくも里あたるも墨が潑うおとく、一陣の暴風吹たは。  
 波濤山のぶとくたこ。剩へ神鳴ととめさて、もの凜はじ  
 き光景ふる。時はりまあてて雨歇風絶て、海のかさ  
 うちふぶきて、遠水長天一色の浅とどまふとをこ  
 た星やがて一輪の寒鏡雲のたえ間よま轉び出所ハ  
 名たぐる須磨明石對面のかとの淡路島蛇のおとく  
 小匍匐阿波の眉山黛のおとくさやりぬま、夫の時阿  
 蘇次郎ハ、舩ふよま眺やまけるが、猛然と想出しけるハ、

往年宇治の螢狩よこ、はうらども絶世の美人ハ奇遇  
 一が、そのとまも、かむうまさやけさ、月の夜ふる  
 所ハかともど、今月今日、そのぬーハ、いっおぬアけるぞ青  
 春破瓜頃かま。今比ハ齒がそめ、袖とけりて、誰が金  
 屋の花とふかまけん、その後手小入ー一首の戀歌ハ、  
 かまての末のうき身が、いっおせん、たもうけ隔宇治の川  
 霧中たゑぐの霧たち人、その名深雪と書たるを、懐  
 紙よ卷そへて、来せーハ、こま小眞情ありや、ぬーや、あつ  
 かーの都鳥、ふと問よーも波のうへよ、さーうつむけハ、襟  
 もと小、冷まとなちとる、笠の滴よ、たもいず、仰ぐ後背ハ、千  
 石船の水押の下、原来前の白雨小、かの船よ、繫合ありしう

巻之三

十九



と獨ひとりおちけり ふうめやる。海面うみのかみハまをく 和ま恰あも盃たんぱの  
 水みづのおとく。松まつふく風かぜも音ね絶たけり。おひらぶら。ぬら誰たれ  
 ともしらぬひの心こころはくしの箏こと音ねハ。たう小こ隣りんの船ふねなり  
 と。聞き耳みみたつろ那あ方かたより。轉ころ軸せん撥ま爪づめと三さん両りやう声こゑて。いまど曲きょく  
 とバねさざまど。まづ情まじなある音ね添そよて。まふと小こ大だい絃げんハ  
 嘈さう々と去いて。急いそ雨あめのおとく。小こ絃げんハ切き々々として。私わが語ごのじ  
 といへるねもひあま。春はる雄をとハ志こころバ聞き入いて。たばえずと  
 大おほ涙なみだ小こ涙なみだふふとち。身みより骨ほねは決まて。腸はらハたつばら  
 了しまりし。曲きょく罷ひのちまよ音ねか。只ただ風かぜ清きよく月つき白しろれのと。  
 春はる雄をとねりふやう。さてもあやしたまとうね。今いまの頌まじな歌うたハこれ  
 ひら。三さん線せんの糸いとよ志こころらべ。朝あさ顔がほの曲きょくなま。さるとい

ねる人のいふまを。わくる船ふね路ぢは彈たまぜしぞと。さるる  
 たぐみ真ま夜よ半はん。たもひ不ふそアて居あたはけり。まの人ひと是こゝ  
 別わか人ひとよあらず。秋あき月つき弓ゆみ之の助すけが女むすめ兒こ深ふか雪ゆきよぞあまけり。  
 いふまを。今いままの船ふねよあまて。琴こと以も彈たまぜしぞと。ふふと  
 よまさと弓ゆみ之の助すけが故こ主ぬし筑つく前まへの國くに守まもり太た宰さいの少せう貳に殿てん。一ひと  
 個ひとの淫ひん婦ふお蘭らんとりもの女むすめ愛あいせらま。そまが兄あに健けん卒そつ傳でん  
 藏ざうをとつたて。國くに政せい任にんせらま。り。傳でん藏ざうも無む頼らいの  
 匹ひつ夫ふかろむへ君きみの虎こ威いを借かりて。古こ叅さんの人ひと々々民たみよし。  
 不ふ時じの課か設せつとかけ。黎たい民みんと苦くしむ。ふまふよまて御ご領りやう  
 内うちの百ひやく姓せいども。一ひと揆くわい企きて。那な方かた這こ方かた蜂はちのおとくふ起おこり。  
 袖そでが浦うらの御ご城じやう下かよはめりけ。和わ蘭らん傳でん藏ざうを賜たまはるべしと



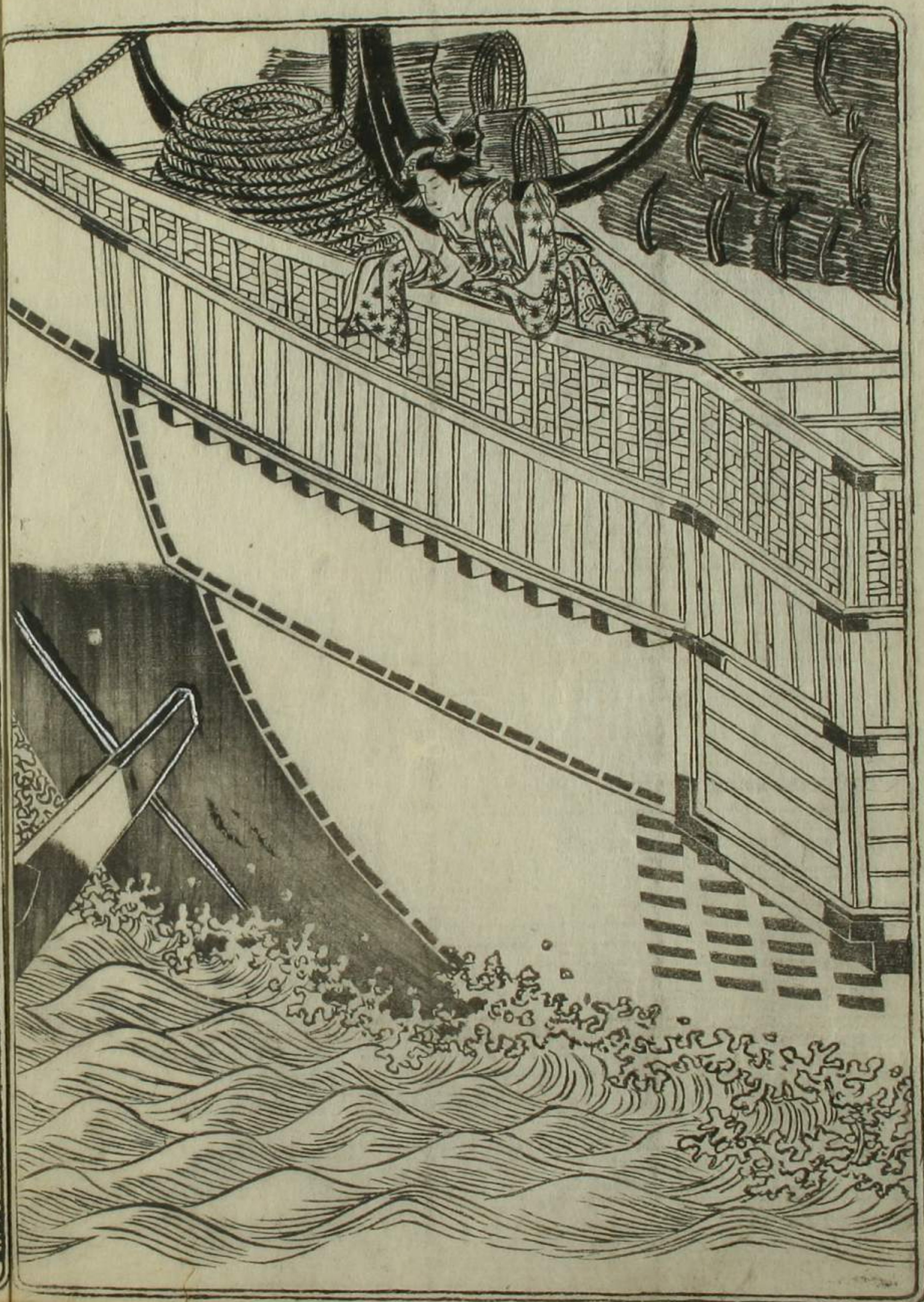
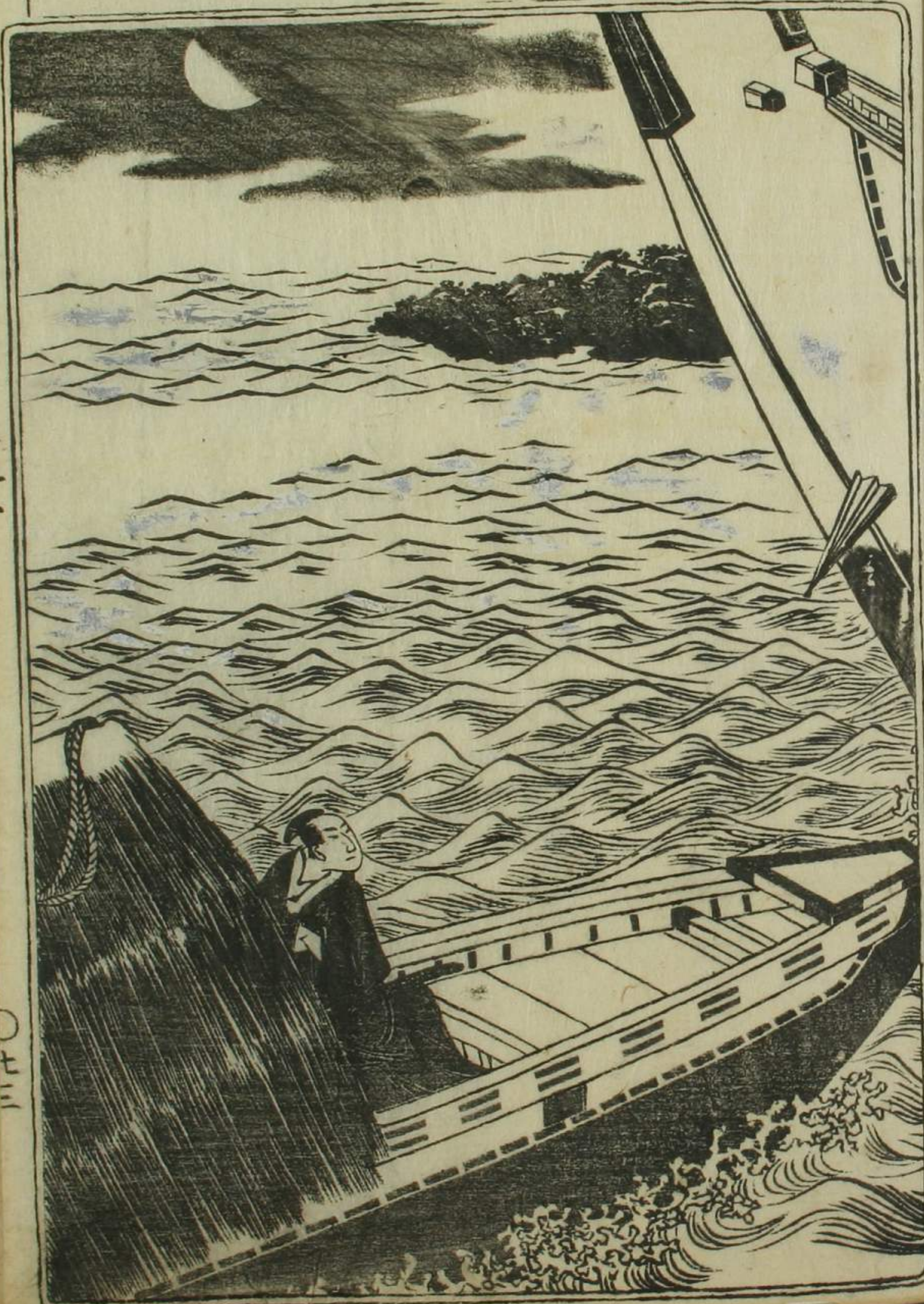
置訴<sup>おきう</sup>かかを。御母堂<sup>ごぼどう</sup>紫光院<sup>むらみつゐん</sup>殿<sup>どの</sup>の御心<sup>ごこころ</sup>はさして秋月<sup>あきづき</sup>弓<sup>ゆみ</sup>  
之助<sup>のすけ</sup>と召回<sup>めいまい</sup>さま。その大乱<sup>おほいらん</sup>と静<sup>しず</sup>むべしとの上意<sup>かみい</sup>か。弓<sup>ゆみ</sup>  
之助<sup>のすけ</sup>初國<sup>はつくに</sup>を出<sup>いで</sup>し時<sup>とき</sup>は。再本國<sup>ふたたびくに</sup>へい田<sup>い</sup>らどとねしひし。さ  
その弓<sup>ゆみ</sup>之助<sup>のすけ</sup>いまだ見姓<sup>けんせい</sup>たちの比<sup>ひ</sup>御松<sup>ごしょう</sup>籙<sup>りく</sup>の席<sup>せき</sup>よて祝言<sup>いわげん</sup>の  
謠<sup>うた</sup>かるといひ損<sup>とん</sup>じ。已<sup>も</sup>罪<sup>つみ</sup>せらるべきふさいまつと。紫<sup>むら</sup>  
光<sup>むらみつ</sup>禪<sup>ぜん</sup>尼<sup>に</sup>その比<sup>ひ</sup>。御簾<sup>ごまゐらう</sup>中<sup>ちゆう</sup>よていと嫩<sup>な</sup>やりよ新羅<sup>しんら</sup>の前<sup>まへ</sup>  
とまうせし。殿<sup>どの</sup>へ御託言<sup>ごたくごん</sup>仰<sup>おほ</sup>せらま。こまじく。御執成<sup>ごしつじやう</sup>  
ありあへ。辛<sup>から</sup>くて危<sup>あや</sup>きか助<sup>たす</sup>けぬ。その大恩<sup>おほいん</sup>須弥<sup>すみ</sup>よて高<sup>たか</sup>  
倉<sup>くら</sup>海<sup>うみ</sup>よて深<sup>ふか</sup>けま。その度<sup>たび</sup>ハ曲<sup>まが</sup>て。御母堂<sup>ごぼどう</sup>の御内意<sup>ごないい</sup>ふ  
またぐひ。忙<sup>いそ</sup>ハ。支度<sup>しど</sup>かか。岡崎<sup>おかざき</sup>の寓居<sup>やうき</sup>ハ渾家水<sup>こんけすい</sup>  
青<sup>あお</sup>よ托<sup>たく</sup>してまを完<sup>ま</sup>いせ。あしよて下<sup>くだ</sup>て来<sup>き</sup>るべし。手<sup>て</sup>

苦<sup>く</sup>みさどめ。おのをいまら。女兒<sup>むすめ</sup>深雪<sup>ふかゆき</sup>が具<sup>ぐ</sup>し。どまかれし  
都<sup>みやこ</sup>がたちいで。浪花<sup>なみな</sup>の港口<sup>みなと</sup>よて國守<sup>くにまもり</sup>の御手船<sup>ごてぶね</sup>よ乗<sup>のり</sup>て  
下<sup>くだ</sup>りける。まもも前の暴雨<sup>あまのあめ</sup>よ遇<sup>あ</sup>てこの明石<sup>あかし</sup>の浦<sup>うら</sup>よ  
泊居<sup>とど</sup>たる。ふつ。さてま。弓<sup>ゆみ</sup>之助<sup>のすけ</sup>が娘<sup>むすめ</sup>の深雪<sup>ふかゆき</sup>。ひととび  
宇治<sup>うぢ</sup>の螢狩<sup>へいかり</sup>よて。宮城<sup>みやぎ</sup>阿蘇<sup>あそ</sup>次郎<sup>じやう</sup>を眷戀<sup>けんれん</sup>し。が。ねかし  
都邊<sup>みやとべ</sup>よ拙<sup>せつ</sup>か。が。ら。ふ。と。び。あ。ひ。見<sup>み</sup>よ。も。ぬ。く。その。う。へ  
さる。奸人<sup>あせもの</sup>のためよ。こま。と。げ。ら。ま。剩<sup>ま</sup>ゆく。ま。ぬ。く。と。  
筑紫<sup>つくし</sup>へ。く。ど。ま。わけ。何日<sup>なんにち</sup>ま。こ。が。情郎<sup>せいやう</sup>よ。あ。ひ。て。は。し。と。  
おもひ。忘<sup>わす</sup>れ。ひ。ま。も。ぬ。く。ひと。と。ら。あ。く。か。ま。は。け。く。心地<sup>こころぢ</sup>こへ  
例<sup>れい</sup>から。ず。と。その。白雨<sup>しやくう</sup>の怖<sup>こは</sup>さ。よ。羅<sup>ら</sup>ひ。き。被<sup>ふ</sup>て。ふ。し。あ。さ。る  
小<sup>こ</sup>。や。と。ら。う。ち。ま。づ。ま。ま。海面<sup>うみづ</sup>も。ぬ。ぎ。た。ま。と。船子<sup>ふねこ</sup>ど。もの

巻之三  
七二



秋月弓之助  
 女見深雪  
 明石の浦  
 船泊して  
 とうらす情  
 郎阿模次郎  
 環會



〇成元加作  
 卷之三



罵りる奴聞へしものうげよ起出ーが、船口よこー入るく、  
 月光あうく志て、白日のおとく、夜しいとく更て人ふ眠る  
 ふしたる小ぞ、あそらふはま琴が搦鳴し、こが情郎の記  
 念ぬる。朝顔の唄ぬまらべけ、慕ひ屈したるとーごろの、  
 かもふあうろぬふくませせて、このあいさげよ弾けけるよ、阿  
 蕪次郎あ曲と、こたハまて、且あやーも、且ちーもた  
 その人のかづーく、僥倖と京へ官あづまよのぼる、暫  
 者と同船ーゆへ、そまが擧る蛇皮絃を借てのを抱、一年  
 深雪が母、氷青が宇治よて弾る、梅が香ぬいとぶら、妙よ  
 あやどまバ、あゝの搦音が灰聞て、隣船なる深雪、肚裏よ  
 や徹けん、耳が側て眉をひそめ、聞いとくやど、その人め

とてねむがえけり、しとよまあ、の深雪ハ、蔡邑が子よ  
 あらぬど、音が知ると比ぬく、こが情郎の音、漆とハ朧氣  
 からず猜せーよ、やとら臥處とあ、のひ出、喝踏ーして  
 櫓よあがて、欄よ倚て見ねるをよ、恰好阿蕪次郎し、苦  
 ねー割て穴規へい、いよとやけと月明よ、偶とうち仰て、  
 思ハせる顔の、まがふ、とぬき深雪ふるよ、深雪も春  
 雄とそまと認むまバ、あひかつーといしんとせー、後よ  
 つ、いつ間ら之助、女児が帯を捉て、こを危ふーといれ  
 入まバ、深雪ハやるせかく、こが在あたと志らせんと、記念  
 の扇子ぬとこもあへど、春雄をわがけて投まらる、あゝの  
 扇子あやまとず、阿蕪次郎が顔とあをこちて、その



ま、膝の上よ、ふまてぬ阿蘇次郎いこしやあそしと拾  
 しめへどとしひらき。月よとせげ、たほえある朝顔の繪  
 賛か。とまびあそ猜せしおとく。さきつうこの琴ぬしも。  
 深雪よてましけと。まどく深雪が真情とまて。身よ  
 ちりて感付け。深雪はたまさりのたへりよ。語もかいたず  
 親よさうきし。うきみかひち父の熟睡を待  
 かねてやうく志のび出来まど柵樓よ。そし覗け。  
 怖さねそろしともねいはず。度と落音よ。阿蘇次郎ハ  
 突一驚し。て見てあをば。深雪ハ三板ハ隨たとま。息  
 もたゆらむ。うらみの光景よ。阿蘇次郎慌忙飛のて抱れ  
 けへ。還丹がふくませ。多方といさ。けと。深雪ハ

やうくよ人心地ほくよ。阿蘇次郎がまつと見て。  
 いしうましけ。うらまも。知し。めと。うへいさ。まらねど。  
 妻が名ハ深雪として筑紫の浪臣秋月弓之助が娘  
 ぶてしべる。とし。宇治の川舟よ。ふと眷戀たる  
 赤繩よ。その螢火ハ焦をねど。さう。ゆるハ妻の  
 胸のうちよ。月見會し。いとづら。ふいたつと。たま。難  
 面ハ月よ。むら雲花よ。風あ。と。媒人よ。あさむ。種々  
 のと。また。げよ。あひし。よ。た。一。を。ちの。赤繩よ。た  
 し。ひ。か。そ。て。玉の。緒。し。不。ど。く。絶人と。せし。そ。や。い  
 まど。枕。か。か。と。ね。と。貞女。兩。夫。よ。ま。ま。え。ぬ。操。と。露  
 ば。り。と。憐。と。お。ほ。し。鸞。傳。と。お。て。た。ま。い。ね。と。



膝よりいしとちふして、咽びいそけくときける阿  
 蘓次郎も、深雪が心根とたしひや、その道理よ。こ  
 もしてもし、いろふ出ぬる戀衣、とやのさねまくたもへ  
 どし、娶よかふらど媒あ。互よ武士の家よりまき  
 ぶでう不正事ねとべきや、我望が遂一うへぶるべに  
 氷人をしりて、表むきよをやいまん。無事ふたハリーて  
 折が待をよ、とやく船一回らせたまへか、とねて環會  
 てんと、ふごめとくして別をんとと、深雪ハ恨の涙声よ  
 て、かくまでおしい志たいし身のだましくあいて、おのま  
 ふうへまとおふと、曲しぬし。阿はまおの身ぬいづ、に  
 もはまのたたまへし、とさぶのま、本國筑前小婦を

ぬへ、芭虬之進とよしのよ合せよと、無体なる殿の仰の  
 のさふらふぞや、たとい命が失ふよとし、異夫よ見え候ま  
 し、ごままかくまれいざくはやく、はまさせたまへと、さく  
 どけハ、阿蘓次郎ハいよ便かくなもへども、こを今姐くぬ  
 けを退ハ、御両親の恨ぬけ、世上の謗ぬいよせん。  
 さぬろろ短くおぼしと、病あもともいつハ、て。期とどね  
 のばしなま、うらち小ハ、仕様模様も待てぬん。まづく  
 船よかへおねと。ごましくといひさとせば、深雪ハつと起て、  
 いう不どよ申てし、諾かひたまはす、ばせひしぬし。さらば  
 ど一声身が躍らせ、ちいろの海へは飛いらんすまは。  
 阿蘓次郎阿呀て抱きとめ、さふどふおぼとことぬらば。



いろふしのぞとふまうせぬん。とま小節よわいって秋  
 月殿の愛子をとば見殺しせんも不仁ふ。合巻いと  
 もかくも。いろ小汚名を蒙るとも。かく實ある情人とい  
 うて泣きぬく見とつべとやいかからずとやま。たまふ  
 ねと。制とる詞は深雪いおらめ。居直りていひけるは。色  
 とよ縁とま。とる母かま。かろま。とふてたちの死  
 しと。あとおて聞たまはん。ふ。よろま。びたまふ。治定なれ  
 ど。とらい恙ぬく。君は從のくこと。た。一行書のことん。  
 硯があらば。か。たまへといふ。阿蘇次郎腰ととぶ。て  
 頭は搔南無三寶前。は。とあ。は。て。墨斗を海へしりし  
 ろ。ま。い。い。せん。と。躊躇。深雪。い。さ。く。よ。と。と。し。ま。ら。ば

今一たび船よりへ。書おさぬの。ま。と。些の細。較  
 と。も。携てまい。と。ねんと。頭。揖。よ。ま。よ。ちの。は。る。阿蘇次  
 郎。腰。が。お。さ。ま。か。ら。う。お。て。裏。よ。入。り。が。卧。處。ふ。い。と。つ。て  
 い。そ。か。い。く。書。置。ぬ。ま。ら。め。その。ま。父。が。枕。も。と。ま。し  
 と。を。起。んと。せ。う。が。ま。て。ま。ば。し。も。し。や。ま。う。さ。ま。ま。う。  
 一生の別とふらんもはうまがと。今いまた。一目。ま  
 て。父。君。の。寝。顔。ぬ。お。が。ま。心。む。か。ま。の。暇。を。と。せん。もの。と。や  
 と。ら。躡。よ。て。見。て。あ。ま。ば。ま。い。か。る。し。と。ま。い。た。だ。戀。の。ミ  
 小。憂。身。ぬ。や。つ。し。は。ね。く。不。孝。よ。過。せ。し。ち。え。天。の。御。罰  
 や。蒙。り。けん。父。君。の。衾。ひ。き。被。と。て。卧。し。たま。へ。ば。御。顔。ぬ  
 拜。む。こ。し。う。か。い。ず。さ。い。ら。ば。御。眼。や。さ。ま。し。たま。い。ん。い。く。い



せんところへおいつ。躊躇たぢたひながらおづしと。蒲團ふんぐんをこし  
 まくもども。何なんも志こころらずして。只ただをやくと寐ね入いたる。  
 その顔かほをほきくうちまして。あら勿な体ていおや。不ふ義ぎ  
 いたづらといふてもおけまど。ねり即すなはちよそひとげん  
 と。おいとま申まをすて出いちきさふらふ。不ふ孝かうの罪つみいあるこせ  
 たまへ。あともてさぞや歎なげきたまはん。おごすねーやと。  
 声こゑとのと。さす別わかの悲かなしとよ。おほえすゆる涙なみだの雨あめ。  
 父ちち弓ゆみ之の助すけ眼まなこがさまし。娘むすめが風かぜ状じやう心こころ得えどとそのまし。  
 裳ももういほりゆらば。おいかかーやと。娘むすめハ声こゑをわけよくと泣なみだ  
 いとすよ。側そばぬる書かき置おきと弓ゆみ之の助すけとらんとす。深こゝろ雪ゆきハあハ  
 てしるよ。早く。窓まどよ。海うみへかけ出いせ。ふのこの音こゝろに

侍女しよじよどもおの底そこ事ことととち騒さわけハ。船頭せんとうおまよ眼まなこ覚さ  
 して。水みづ子こどもお喚おん起こし。やとま地ぢ嵐あらしが出いたハ汐しほも  
 よきぞ。ちやく船ふね出いせと叫こゑぶ声こゑ。舟ふね子こハおまよ激げきま  
 さも。慌あわてふぐりさ働はたらけ。エイヤンサト連つら声こゑして鐵てつ描えが兒こゝろとおに  
 やをら布ぬの帆ほが拽ひあぐまハ。船ふねハたちまち矢やを射いる  
 おとく。一ひと瞬まはたよ走はる去さ。阿あ菴そう次じ郎らうが棄すたる小こ船ふねと  
 せつかよ東とう西せいおひきとるま。まこと良よ縁ゆかりを隔へける。

朝顔日記卷之三 終



